

OB & OG INTERVIEW 私たちを変えた出会い

学生時代の「出会い」が、今の自分をつくりあげた。 先輩たちの姿から、将来の自分を思い描こう！

在学生の皆さんが社会に出て働き、活躍するためには大学時代にどんな意識を持ち、行動すればよいのでしょうか。現在、様々な分野で活躍している先輩方に、選んだ仕事のやりがいや学生時代に出会い、経験が今の自分にどのような影響を与えているのかについてお聞きました。先輩たちの姿から、自分自身が社会で輝く姿を想像してみてください。

INTERVIEW #1

文理融合の学びでの視野の広がり、海外留学での出会い…
自らの積極的な行動のすべてが今につながっている。

株式会社 電通 勤務

小沢 拓己 さん

2003 年 理工学部卒



理工学部在学中は日本人学生と留学生の交流をサポートする学生ボランティア団体 TISA (Tutors for International Students Assembly)、UBC ジョイントプログラムなど数多くの活動を経験。卒業後は株式会社電通に勤務。社会人生活 5 年目を向かえ、充実の日々。

世の中のダイナミズムを体感

大館 最初に、現在のお仕事について教えてください。

小沢 現在は大手金融機関の専属担当営業です。担当クライアントのコミュニケーション領域においてコンサルティング、具体的には予算作成や中長期的なコミュニケーションコンセプト策定といった戦略に関わる業務から、各種キャンペーンのプランニング、そして実



際に CM 制作など、幅広い業務に関わっています。また、クライアントが大きなイベントを開催したいという場合には、そのイベントの企画立案からマニュアル策定、運営までも行います。いわば「何でも屋」というような表現も出来ますが、重要な判断を求められる機会がとても多く、刺激的な毎日ですね。一貫して言えるのは、クライアントとのコミュニケーションを深め、メディアの可能性を提示していくことがすべての業務の根底に流れているということです。

大館 お仕事の中でどのようなことにやりがいを感じますか。

小沢 自分の関わったクライアントのコミュニケーション活動が多くの人々に認知され、世の中が動くというダイナミズムを感じた時は嬉しいです。また自分のアイデアでクライアントの真剣な思いを具現化できた時にはやりがいを感じます。

大館 なぜ、この業界を選ばれたのですか。きっかけとなった経験について教えてください。

小沢 私は学生時代に立命館大学の UBC ジョイント・プログラムでカナダへ留学しました。その時、現地で様々な人と話をしてみると、日本の文化、日本人に対するイメージが海外ではまだまだ知られていないと実感しました。ところがカナダ国内では、日本の電器製品な

どが多くの人々に使われ、多くの企業の広告が街に溢れていました。日本製品が彼らの日常生活に根付いていることを知り、嬉しくなりました。この体験から将来、日本の商品やサービスを世界中の人々に広める仕事がしたいと考えたことが、電通に勤めるきっかけになったと思います。

積極的な行動が生む刺激的な出会い

大館 充実の日々を送られている小沢さんですが、ところで、大学時代で印象に残っている出会い・体験は何ですか。

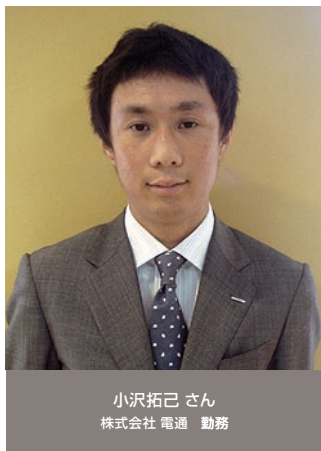
小沢 2 点あります。一つ目はカナダへの留学です。留学中には多くの仲間ができました。その中でも立命館・UBC ハウスで私たちの生活を支援する「アドバイザー」の役割を担っていたライオン君には大きな影響を受けました。彼は私と同年だったのですが、アドバイザーの仕事をする傍らで 2 社の会社経営にも携わっていました。アグレッシブに行動をする彼を見て「自分と人生の切り拓き方が全然違う」と驚き、発奮材料になりました。彼との忘れられない出会いが、その後の人生のターニングポイントになったように思います。

二つ目はゼミでの体験です。留学後、TISA の先輩が薦めてくれた佐藤典司ゼミに所属しました。この頃は広告業界に特に強い思い入れはなく、営業兼務の技術者である「セールスエンジニア」として海外を飛びまわることを将来の進路として考えていました。しかしゼミで「デザイン・情報の価値をどうマネジメントするか」という大きな領域を学んだこと、そして具体的に「立命館ブランドの構築」や「木屋町の活性化」などをテーマにしたプロジェクトを進行させていく過程で、マーケティングなどの分野に興味を持つようになりました。調査や企画会議を経て自分の方向性が固まり、その結果、いまの進路分野を目指すようになりました。ともに研究したゼミ生も、さまざまな希望進路を目指しており、多種多様な考え方のなかで学びあうことも経験

しました。私は理工学部にも所属していたながら文理総合インスティテュートの学生だったので、文系、理系両方の講義を受講でき、常に視野を広げることができたことも進路選択の幅を拡げてくれた大きな一因だと思っています。現在も複眼的な思考・発想が業務にも活用できていますね。

大館 では、最後に在校生へのメッセージをお願いします。

小沢 まずは行動してみることに。これに尽きるとしています。それには「考えてから動く」方法と「動きながら考える」という 2 つの方法があります。頭の中で考えているだけでは、物事は進展しません。在学中に必ずしも留学や起業など、特に目立つことをしなければいけないというわけではありません。まずは日



小沢拓己 さん
株式会社 電通 勤務



林田麻理子 さん
イギリス・マンチェスター大学院
国際開発政策・マネジメント研究所在学中



陰山英男 教授
立命館大学教育開発・支援センター教授
立命館小学校副校長

INTERVIEW #2

立命館大学入学が夢の第一歩。
大学生活で得た財産を糧に国際貢献の場で活躍したい。

イギリス・マンチェスター大学院
国際開発政策・マネジメント研究所在学中

林田 麻理子 さん

2005 年 国際関係学部卒



国際関係学部在学中はアメリカン大学への交換留学、社団法人日本国際民間協力会 (NICCO) でのインターンなど海外での生活を数多く経験。インターンではスリランカ地震の支援のため、4 ヶ月間現地での生活を送った。NICCO へ就職し、パキスタン地震での被災者支援業務に携わるなどした後、2006 年 9 月よりマンチェスター大学院へ入学。国際支援に関わるための勉強を現在も続けている。

自分の夢を海外で実現 被災地支援でさらなる成長

辻 現在イギリスの大学院で学んでいる林田さんですが、在学中から国際協力 NGO で働いていたそうですね。どのようなお仕事をなさっていたのですか。

林田 4 回生の夏、国際協力 NGO である社団法人国際民間協力会 (NICCO) でインター

ンシップに参加しました。そこでは数ある支援業務の中から広報業務を担当しました。アフガニスタン支援のためのチャリティオークションを行い、資金の寄付を募る活動に携わりました。チャリティイベントを成功させるために準備をする過程は楽しかったです。また広報担当として事業報告を会報にまとめることで、自分たちの集めた資金が海外でどのように使われているのか、全体像を掴むこと

代の挑戦が、将来の自分をつくります。この立命館で、自分の人生を切り拓く大きなステップを踏み出してください。



大館 司 さん
政策科学部 4 回生
学生広報スタッフ

学生時代は常に目標を持ち、走り続けていた小沢さん。今も広大なフィールドでクライアントの期待に応えるため、東奔西走の毎日をご過ごされています。お話を聞き、改めて実践することの大切さを感じました。頭でっかちで考えているばかりでは、何も始まりません。考え、実行するという「知行合一」の精神を今後の学生生活で大切にしていきたいと思いました。

ができました。

辻 NGO で働こうと思ったきっかけについて教えてください。

林田 幼い頃から国際社会に興味を持ち、小学校の卒業文集には「将来はボスニアで働く」と書きました。ただその時は、漠然と国際社会で働きたいと思っていただけでした。そして高校生時代、留学時に国連本部を見学、はっきりと国際貢献を「職業」として意識することができました。そのために大学で国際関係学を学びたい気持ちが強まり、その後は大学院に進み国際支援の勉強をするんだ！といったキャリアを描きました。進学先に立命館大学の国際関係学部を選んだ理由も、まさにそこにあります。在学中もドイツへの短期留学やアメリカン大学への交換留学を経験したことで、いっそう世界で働きたいとの気持ちが強くなりました。進路選択の際、進学か、国外での就職か悩みましたが、まずは実際の国際貢献の現場を知ろうと考え、インターンを行っていた NICCO で仕事を続けようと思えました。

辻 なるほど。では、NICCO ではどのような活動をされていたのかをお聞かせ下さい。

林田 卒業後、2005 年 9 月に職員になっ

学生時代の「出会い」が、今の自分をつくりあげた。
先輩たちの姿から、将来の自分を思い描こう！



た矢先、パキスタンで大地震が発生しました。NICCOのメンバーと緊急に現地入りしたのが職員として初めての活動です。当初は現地調査をし二週間で帰国する予定でしたが、振り返れば半年以上現地での支援活動を行いました。前半は調査やテントの配布を行っていたのですが、翌年1月からは現地統括として、中心となって活動しました。複数の団体をまとめる苦労はありましたが、その分他団体の働き方や支援への関わり方を知ることができ、実務経験を積むことができました。

自分を変える出会いはすぐ近くにある

辻 幼いころからの夢であった、国際貢献の現場で働くことが実現した林田さんですが、なぜ、大学院への進学を志したのでしょうか。また、学部生時代のお話もお聞きたいです。

林田 NICCOへの就職後、そのまま現地に

とどまって働く道も考えました。しかし支援現場での専門家との意見交換、海外の大学院を出た他団体の職員との実際の対話などから、海外の大学院に進学し、より専門的な国際支援の勉強を行おうと決意しました。海外の大学院はどの学生も積極的で、大声で質問や意見が飛び交う環境に最初は驚きました。ただ、学部時代は英語の授業でディベートやディスカッションを多く経験しており、当時から積極的に発言を心がけていたので、この経験が今にとっても活かされていると思います。

辻 では、立命館での最も印象的な「出会い」は何でしょうか。

林田 私は立命館に入学したことが最大の「出会い」だと考えています。もともと勉強したいと思っていた国際関係学に加え、専門的な英語の授業など、知的好奇心を刺激されるようなプログラムが立命館には数多くありました。夢への第一歩としての立命館があり、立命館を幹にして私の活動フィールドが形成されていったと思います。正課の英語の授業では、双方向のコミュニケーションを活かして勉強した結果、自分の意見を主張し、他者の意見を取り入れる能力を養えました。これは、世界で支援活動をする上で大きな力となっています。また、現在も付き合いのある仲の良い友人と知り合えたことも、印象的な「出会い」のひとつです。学生時代はそれぞれが異なる興味関心で主体的に動いており、そんな友人関係のなかで私も刺激を受け、成長できたと考えています。卒業後も、様々な分野で活躍するみんなと会って日本での働き方や仕事への関わり方への話を聞くと、これからの自分がどう進んでいくべきかを考えさせられます。このように今後の新たな自分を形成するうえでも、大学時代の友人と出会えたことも非常に貴

重な経験です。このように、自己実現の過程で、立命館でのキャンパスライフで出会えたものすべてが、私にとって貴重な財産です。

辻 学生生活はあっという間ですが、「出会い」から身につく力はたくさんあるのですね。それでは最後に、学生へのメッセージをお願いします。

林田 立命館にはすばらしいフィールドが準備されていると思います。自ら考え、積極的に行動していけば、より一層学生生活が充実したものになると思います。私は国際社会への関心から、正課の授業や留学など、自分にプラスになると思ったことは貪欲に追い求めてきました。怖がらずに一歩踏み出すことが、結果的に今の自分の幅を広げることになったと思います。まだやりたいことが決まっていなくても、少しでも興味があれば、一歩踏み出してトライしてみてください。立命館には、興味あることにチャレンジできる環境があふれています。それを主体的に使ってやろうという気持ちで、切磋琢磨し成長し合える友人を大切にしながら、学生生活を過ごしてほしいですね。



「常に自分次第」。林田さんの、その言葉がとても印象に残りました。どんな状況下で置かれてもポジティブに受け止め続ける考え方を、私も大切にしたいと思います。学生生活も残り9カ月。社会に出ていく前に、自分とは異なる考え方・視点に触れることで、自身の幅が広がるように積極的に行動していきたいと思いました。

ホームページにもキャリア形成に役立つ情報が盛りだくさん

<http://www.ritsumei.ac.jp/infostudents/index.html>

「在学生のための情報サイト——Infostudents」は、立命館大学の在学生に必要な情報が集まったホームページです。大学トップページの「在学生」メニューをクリックして、アクセスしてください。キャリアについて考えるヒントが見つかります。



SPECIAL MESSAGE

特別寄稿

大学時代の『出会い』から生まれた教育哲学

立命館大学大学教育開発・支援センター教授
立命館小学校副校長

陰山英男 教授

大学時代の出会いや学びの中から、いったい何を得ればよいのか？
百マス計算などの陰山メソッドで知られる本学教授、陰山英男先生も、30数年前は大学生でした。今の学生の皆さんと同じように、卒業後の自分について模索していた先生が、感銘を受けた出会い、そして今につながる哲学を身につけたきっかけは何だったのでしょうか？

私が大学院に進学した一番大きな理由は、アナウンサーになりたかったからである。しかし、そのためには一体どんな勉強が必要なのか。当時はまったく分かっておらず、漠然と岡山大学法学部を受験した。理由は簡単。どの学部を受験しても合格する自信はなく、どうせ落ちるなら一番難しい法学部を受けた方が格好がつくと考えたからだ。まっとうな理由なく法学部を選んだわけであるが、振り返って見た時、法学部に行ったことは自分にとって大正解であったように思う。

私は岩間一雄先生の「東洋政治」という政治学のゼミを受講していた。そこで象徴的に覚えているのは、「言葉や思想というものは、実は意図的に作られている」という先生の言葉だ。聖徳太子の言葉を引き合いに出され、こう言われた。「和を以て貴しとなす」と言った背景には、世の中が和となっていないという現実があったからだ。経済力や軍事力だけでは統治は完成されていなかったのである。それで「篤く三法を敬え」、「和を以て貴しとなす」という、思想・イデオロギーによって、統治を補完していったのである」と。思想や考え方というものは、一個人の頭の中から生まれてくると私は考えていたのだが、そういったものが統治のために意図的に作られているという考えが、非常に新鮮であった。これらのことは、「言葉というものは往々にして、現実の厳しさを覆い隠すために存在するのだ」と自分が考えるようになったきっかけでもある。そこにある言葉そのものよりも、その言葉が、どういう事実によって支えられているのかということを絶えず見るようになった。そう、そのおかげで教師になり、現場で奔走する中でも「ゆとり教育」、「個性

尊重」などのキャッチフレーズが、「実は個性を尊重しない。実質的には、子供たちにゆとりをもたささない」ということにも気がつくことができたのである。「陰山先生は教師を目指して教師になったわけじゃないというところに、一つのポイントがあるんだ」。私を取材した何人かのジャーナリストはそう言う。情緒的、感情的にではなく、現実的に物事を考えるという独特なスタンスは、大学時代に学んだところが非常に大きい。



もう一つ、私の学びというものの根本的な原動力は、好奇心ではなかったかと思う。大学には、全国のあらゆる所から、自分とは違う環境の友達が集まってきていた。その友達とギターを持って歌ったり、夜な夜な集まって、深夜まで飲んだり自分たちの将来のことを語ったりした。後にして思えば、絶えず持ち続けた好奇心のおかげで、講義を骨格にしながら、さまざまな人との出会い、本との出会い、考え方との出会いにより生き方、探究心、哲学を身につけることができたように思う。結果、私にとっての大学の4年間は、後の人生を豊かにしてくれた、ものすごくありがたい、贅沢な時間であった。

大学卒業後は、アナウンサーになるという

夢が破れ、結果として教師の道を選択した。就職浪人し、教員採用試験のため行った、短期間での猛勉強。「徹底的に繰り返して覚えれば脳が自然と記憶する」という実体験を積んだのもこの時期だ。この経験が後年、読み書き計算の実践を支える精神的支柱になり、同じ時期、小学校で学童保育のアルバイトをし、様々な人生を背負う児童たちと出会った。「いい先生になりたい。」彼らと接し、初めて教師としての使命感が芽生えた。いずれも、今の自分を形成する大切な機会であり、出会いである。

立命館大学で学ぶ皆さんへ。大学の4年間というのはあっという間に過ぎてしまいます。講義を大切にしながら、旺盛な好奇心を失うことなく、多面的な学びをし、成長して下さい。立命館大学には、きっと皆さんの成長を促す出会いが多く転がっていますから。

●プロフィール

陰山英男（かげやま ひでお）

1958年兵庫県生まれ。岡山大学法学部卒。兵庫県尼崎市立園和小学校を振り出しに、兵庫県城崎郡日高町立三方小学校を経て、1989年、兵庫県朝来郡朝来町立山口小学校に赴任。「読み書き計算」での徹底した反復学習と「早寝、早起き、朝御飯」の生活習慣確立の二つを柱にした実践を10年以上続け、基礎学力の向上を目指す「陰山メソッド」を確立。2003年4月尾道市立土堂（つちどう）小学校校長に全国公募により就任。2006年4月から立命館大学大学教育開発・支援センター教授（立命館小学校副校長兼任）に就任。文部科学省・中央教育審議会 特別委員。内閣官房「教育再生会議」有識者委員。